# 頭頸部腺様嚢胞癌における脱分化とその細胞像について

◎神月 梓[1)]、龍 あゆみ[1)]、棚田 諭[1)]、山本 章史[1)]、原田 博史[2)]、中塚 伸一[3)]、本間 圭一郎[2)]
地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪国際がんセンター 臨床検査科[1)]、地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪国際がんセンター 病理・細胞診断科[2)]、医療法人徳洲会 八尾徳洲会総合病院 病理診断科[3)]

【はじめに】
唾液腺の腺様嚢胞癌では定型的な低悪性症例のほか、分化の低い充実成分を伴った高悪性症例、さらに低悪性癌から高悪性癌を二次的に生じた脱分化症例が知られている。脱分化症例は臨床的に予後不良で、急激な増大を呈する症例が多く、広範な切除やリンパ節郭清が必要となる。近年当科で頭頸部腺様嚢胞癌の組織学的再検討を行ったところ、定型的な低悪性例が全腺様嚢胞癌の過半数を占めるものの、残りの 4 割に及ぶ症例が脱分化症例であったことが示された。今回はこれらの症例の中から組織診検体と細胞診検体との対比が可能であった症例を抽出し、脱分化症例の細胞像の解析、さらに他の定型的症例との比較検討を行ったので報告する。

【材料と方法】
対象は 2005 年から 2016 年に当院で診断された腺様嚢胞癌計 7 例で、内訳は低悪性症例 2 例、高悪性症例 1 例および、脱分化症例 4 例であった。これらについて十分再検討に耐える細胞診標本のみを用いて観察を行い、さらに各症例間での比較検討を行った。

【結果】
篩状構造と 2 層性腺管を主体とする低悪性症例では、細胞診標本においても球状硝子体を取り囲むように小型細胞が配列する典型的な篩状構造を認めた。腫瘍細胞は小型で N/C 比の高い基底細胞様の形態を有し、異型に乏しく単調であった。充実性胞巣が著しく優位を占める高悪性症例では、低悪性症例で認めた球状硝子体はほとんど認められず、核の腫大傾向、細胞密度の上昇がみられたが、基底細胞様の形態を保ち、より結合の緩い小型集塊として出現した。悪性の判定は可能であるが、腺様嚢胞癌に特徴的な細胞所見に乏しく、組織型の推定は困難であった。脱分化症例では、核密度の高い集塊で N/C 比が高く、クロマチンパターンは細～粗顆粒状のばらつきがあり、核小体腫大などの細胞所見を認めた。核は全体的に大型で、核形不整や大小不同が目立ち、基底細胞様の形態はさらに不明瞭であった。高悪性症例と同様、悪性の判定は容易であるが、腺様嚢胞癌を示唆する細胞所見はほとんど認められなかった。

【考察】
細胞像より脱分化型腺様嚢胞癌を悪性と判定することは容易であるが、高悪性症例と同様に腺様嚢胞癌の特徴的な細胞所見は乏しくなるため、組織型の推定は困難である。理由として、組織学的には低分化な腺癌 NOS あるいは未分化癌に相当する脱分化成分が腫瘍の大半を置換し、腺様嚢胞癌の特徴を残す細胞成分が失われてしまうことによるものと考えられる。唾液腺においてこれらの組織型は稀であり、特異的な所見に乏しいとはいえ、治療前にこのような高悪性成分を検知することは臨床上有意義である。後日の組織検体の検索において診断上有益な情報を与える意味で細胞診の果たす役割は大きいと考えられる。

連絡先―06-6945-1181